

文化

沖縄戦後美術

モダニズムへの視座

◇2

上原 誠勇

沖縄の戦後美術を検証する今回の展示会は、五年後に開館を予定している沖縄県立現代美術館にちなんで、その前準備とも言える企画展である。今年に歴史的にも戦後五十年の節目にあたり、時代背景を考えればその社会的意義は大いだろう。県の美術文化行政は手薄で遅れがちの音が聞かれる中で、自前の美術に本格的なメスが入られる。おそろしく、沖縄の美術史上初めてのことだ。大いに



うえはら・せいゆう  
1947年南風原町生まれ。  
70年伊勢崎美術研究所修了。  
77年月刊誌「青い海」入社。  
81年同退社。「画廊沖縄」設立。

興味をそそられる。

モダニズムという概念

しかしながら、もう手をあげて喜んでいるわけでもない。開館を五年後に控え、やや勇み足とも感じられるからである。行政の立場で美術とその歴史を専門的に検証するとき、必然的にその体系化と権威化がついてくる。調査・研究に十分な時間を費やしたであろうか。現在、県にはその対象となる県内作家の作品コレクションもほとんどないのが現状だ。また、専門員(学芸員)が満足に研究できる環境や設備、予算なども整っていないと聞いている。本来ならこの類の企画は、美術館の仕事である。ある種の歴史的あやまちを犯さないためにも、慎重に取り組むべきではないだろうか。

さてシリーズ第一回は「モダニズムの系譜」である。戦後五十年の歴史と時間の流れの中で、沖縄の美術はどのような道を歩んで来たか、モダニズムという概念を通して探る試みである。

と云うので、このモダニズムとは一体何であろうか。日本語ではカルトに始まる思想の近代主義と

初めて本格的なメス

慎重な取り組みを望む

訳される。ヨーロッパに生まれた近代主義は、古くはルネサンスの時代、また自然科学の発達した産業革命の時代から出発しているといわれる。日本においても明治の西歐化近代化は、モダニズム獲得の歴史であった。

美術家の意識は

私たちは今、このモダニズムの社会構造の中で生きていく。明治の日本的近代化が進められる中、沖縄においても近代主義を受け入れ、大きな社会的変化を生んだ。戦後も軍政下、そして日本復帰と近代主義のシステムを構築してきた歴史がある。そこで、沖縄のモダニズムの問題は、このような歴史をたどる中で、美術家たちが何を意識し何を芸術として表現したかということになる。共同体社会の色濃い沖縄社会で近代主義はどのように反応・格闘し、美術表現がなされたのであろうか。

モダニズムの問題は、ポストモダンが叫ばれたことから、やや下火になってきたが、東西ドイツ統合、ソ連崩壊、高度情報化のもたらす社会的諸問題や、新しいところではオウム問題も含めて再浮上した感がある。究極のモダニズム

社会としての共産・社会主義は限界を示し、破綻してしまった。二元論・二進法的手法によってもたらされた世界観の崩壊であり、デジタル化し進化して行く社会に疑いの目が向けられている。

一般的に美術におけるモダニズムを語る場合、ポロックに始まる抽象表現主義以降のモダンアートやコンテンポラリー、日本では現代美術、その中のモダニズムをいう。

脱ポストモダン

しかし広い意味では、セザンヌから始まる印象派から第二次大戦までの美術もモダニズムがもたら

ダン、脱ポストモダンの状況を生んでいる。この論理的手法のモダニズムの流れは、究極のモダニズム社会(共産・社会主義)の末路と同様な道をたどることになった。近代主義のもたらした社会で、美術や政治・社会思想の中に同質の思考経路が見え隠れする。

約百年前にヨーロッパに生まれた美術史上の近代主義は、沖縄の美術においては戦後五十年の間に近・現代美術を受容してきたことになる。著しい社会変化の中で、加速度を増し圧縮されて入ってくるモダニズムを沖縄の美術家たちはどのように受け止めたであろうか。美術は表向き生活や日常性が

したものであり、モダンアートである。このヨーロッパ時代のアートを日本では区別して近代美術と言っている。

ポロックから始まるモダニズムのアートは形式化し、先鋭化してミニマルやコンセプチュアルアートを生み、一九七〇年代には閉塞してしまふ。そして今日のポストモ

ら離れたところにある。しかしその時代的背景や思想から抜け出て美術が成立することはあり得ない。はたしてこのモダニズム、十分に思考され、具体化し、血肉化されたであろうか。今回の企画の意義はまさにそこにある。

(「画廊沖縄」代表)